

「漢方打合せ会」は当時の薬務局製薬課長の岡浩策氏が主宰された私的な会と思われる。班員は大塚敬節(修琴堂医院)、浅野正義(本郷高島堂薬局)、西本和光(国立衛生試験所生薬部)、菊谷豊彦(東京都教職員互助会三葉病院内科)の四名である。当時の日本の漢方医学の成書から処方を選び、月二回の会議をして、約一年後に一般用二百十処方を選んだ。A『臨床応用漢方が処方解説』矢数道明著(創元社)、B『症候による漢方治療の実際』大塚敬節著(南山堂)、C『漢方診療医典』大塚、矢数、清水共著(南山堂)、D『漢方処方応用と実際』山田光胤著(南山堂)。上記四書が基本的な成書として選ばれた。それ以外にも当時の漢方医学の書が参考にされた。

処方撰定後、効能・効果の決定は漢方生薬製剤調査会において行われた。

前述のように漢方生薬製剤調査会の発足は昭和四十六年十二月四日である。同調査会の構成班員は漢方打合せ会と同じである。座長には大塚敬節が就任した。

演者は昭和四十六年十二月四日の意義を次のように考えている。

日本国が近代国家として、初めて「漢方」という言葉を用いたのは、昭和四十六年十二月四日である。この日こそ、行政が漢方薬を評価した転換の日である。このことを医史学的にはつきりと認識するべきではなからうか。

その背景にあるのは、結核・感染症の激減、薬害の多発、

神経症、アレルギー性疾患などの増加によって、漢方薬による個の医学が重視されてきたのであろう。

供覧した資料は班研究の分担研究報告書の分担課題名と班員名、一般用二百十処方を選ぶ前の基本的漢方処方一覧表、漢方生薬製剤調査会の辞令などである。

(平成十三年五月例会)

吉益東洞『古書医言』における儒教經典

館野 正美、大山 昌道

吉益東洞(元禄一五(一七〇二)年—安永二(一七七三)年)、名は為則。我が国江戸時代における、いわゆる「古医方」最大の医家である。彼はその病理学的思惟の脈絡において、中国古代の内経医学以来の伝統であり、我が国においても曲直瀨道三に代表される「後世方派」の医家たちにも、きわめて一般的であった陰陽五行説を排し、一切の病因はおろか病名すらも全く語ろうとせず、[△]万病一毒説[△]の旗標のもとに峻剤による汗吐下和四法の徹底を主張し、更に独自の[△]天命説[△]を唱えて、時にいささか過激とさえ評される一大臨床家(実践家)であった。

この吉益東洞の医学思想を考究するに当って、その中心的資料となりうべき東洞の一大著作が、彼の『古書医言』であったと考えられる。中国の古典文献中に記されて残存する、中国古代の医学思想についての、東洞の考え方が、きわめて

単刀直入に記述されており、いわゆる「万病一毒説」をはじめとする、東洞の医学思想を解明し、あわせてその特質を浮き彫りにするための、好箇の資料であると考えられる。

ところが、この『古書医言』という書物それ自体、特にその医学思想的な内容については、従来ほとんど研究されてこなかった如くに見受けられる。おそらく、その調剤・薬功などについての書物——たとえば、『薬徴』や『類聚方』など——についての医薬学的分析を通じて、その医説を研究することに比して、東洞の医学思想そのものについては、従来あまり考究されることがなかったためであろうが、ここにおいて、従来の東洞研究——特にその『古書医言』に見える医学思想——には、更にいささか補なう点があるように思われるのである。

今回の発表においては、『古書医言』巻一に見えている『易経』・『書経』・『詩経』・『礼記』・『春秋左氏伝』・『周礼』・『論語』といった、いわゆる儒教経典からの引用と、それに対する東洞の論評に検討を加え、その医学思想が、如何様に敷衍されているかを、いささか概観してみた。

そこでまず指摘されうることは、これらの儒教経典に対して東洞は相当の敬意を払い、これを尊重する態度を取り、内容的にも又、注疏まで限なく読み、易学や礼学の知識も十分に有しつつ、あくまでも経学的な観点からではなく、医学思想あるいはその臨床的な興味から、これら儒教経典を読み、コメントを付しているということである。これは『古書医言』

という書物の性格上、当然のことであるとも言えようが、逆に又、このように東洞の医学思想の淵源形態を、当時としては最も信頼すべき古典的書物である儒教経典——延いては中国の古典文献——に追究しているということこそが、この『古書医言』の本質的な内容であり、既にその第一巻のはじめから、それが典型的に看取しうるのであるというこの一点は、やはり十分に指摘すべきところであると言えるであろう。

更に指摘すべきは、これも又、東洞に特徴的な、彼のいわゆる天道／人道の区別と陰陽（五行）説批判であると思われる。これもやはり東洞における最も基本的な主張であればこそ、それが開巻第一葉から典型的に記述されていて、むしろ当然ではあるが、その論述に——とかく東洞は陰陽五行説を否定し去った、との誤解を解く要訣をなす——いささか微妙ではあるが、東洞の明確な意志が見て取れるものと思われるのである。

要するに、彼は、陰陽（五行）説それ自体を否定し去るのではなく、それによって自らの病理学的思惟の体系を論述することを拒んだのであったと考えられる。より端的に言えば、彼は理屈よりもまず治療の実績を重視した、ということになるであろう。とはいえ、そこに又、彼の万病一毒説の主張が微妙に絡み合い、いささかの誤解を招く結果となっていることも事実ではあるが、東洞の論述を虚心に読めば、その言わんとするところもおのずから明らかではなからうか。彼が生涯専心追究した「医道」（『復宗梅諄書』）は、ここにおいても

明らかに現われていると思われるのである。

(平成十三年六月例会)

***** 紹介*****

吉良 枝郎 著

『日本の西洋医学の生い立ち』

著者は二つの医科大学の多忙を極める臨床医学の教職を歴任し、医学部長の要職を勤められながら、日本における現代の西洋医学の生い立ちを、分かり易く後進の若い医師たちおよび患者に知ってもらいたいと念願されて筆を取られたと跋に書かれているが、その目的は充分に達せられていると思われる。

ともすれば医学史の成書は、博引旁証で、文章も固く、読者に専門家を意識して固い姿勢をとるのが通例であるのに、本書は行文は平易で、滑らかであり、といて通俗に墮すことなく、要所に幕間として興味深いトピックも配列され、抵抗なく読みおこせることができる。日本の読書人にとつても高度の教養を身につける格好の良書である。

私が通読して気付いた二、三の点を蛇足として以下に付け加えさせて頂く。

外来文化が我が国に入るときに、伝える側と受け取る側の二通りの観点があるのは当然である。本書は鎖国体制の中で西洋医学を受容した蘭学者たちを中心とした後者の立場から筆を進めておられる。封建時代の日本で西洋医学を伝えた前者の立場にたつて書かれた J. Z. Bowers の *Western Medical Pioneers in Feudal Japan* の名著があり、本書にその引用がないのが残念に思った。

その中に、ボンペが長崎に初めて西洋式の病院を作った時、長崎奉行は自分の身内や高級役人や富裕者だけに病院を利用させ、一人の庶民・農民・商人も入院させなかったことに対し、ボンペは医療は分け隔てなくすべての階級の市民に施されるべきだと抗議したことが紹介され、技術と知識としての西洋医学を貪欲に獲得しようとする日本人に対して、西欧医学の医療の恩恵を庶民に分け隔てなく与えようとする、ボンペの人道主義との軋轢が指摘されている。このような視点は、日本側に立ってだけ西洋医学受容を論ずる時に見失われるが、実は大事な視点なのである。

日本への西洋医学の伝達は、勢い長崎のオランダ医の働きが中心となるが、二二〇年にわたる出島の歴史で、来日した商館医は百五十名を越えるに拘わらず、日本人に西洋医学を伝達することに貢献したのは、ケンペル、ツェンペリー、シーボルト、ボンペ、ポールドウインの五指を屈するに過ぎないことは一考を要する。残りの百四十数名が、稼ぎのためにやってきた碌でもない医者たちであったかどうかは分からない